

文学と人文学

長谷川 弘基

HASEGAWA Hiroki

神戸学院大学人文学部

中村 健史

NAKAMURA Takeshi

神戸学院大学人文学部

要旨 神戸学院大学人文学部は2020年、創設30周年を迎えた。今号の『人間文化』はその記念号として刊行される。この機会に「人文学」及び著者らの専攻する「文学（研究）」の今日的な意義について、対談のかたちで明らかにしたい。対談形式を選んだのは、①人文学部の重視する多様な価値観や観点を示すことが可能であり、②学生や人文学部を志望する受験生たちにとって読みやすい形式であるからである。

人文学ははばひろく多様な問題を扱う学問分野であるが、①みずからとは異なる専攻領域と積極的に交流し、新たな視点を生みだそうとすること、②人間を対象として「人間（あるいは自己）中心の視点」から考察を行うこと、③時代や地域の差を超えて他者を理解し、論理に基づいて相互のコミュニケーションをはかること、④教養や文化の習得を通して、成熟した市民としての思考・行動を可能にすること、などにその特徴を見出すことができる。特に④の視点は重要であり、人文学は市民社会の形成に大きな役割を果たしてきた。昨今の俗論に見るがごとくこれを無用の学問と決めつけるのは大きな誤りである。

キーワード 人文学、文学、市民的教養、文化

■はじめに

中村 人文学部は2020年に創設30周年を迎えました。今回の『人間文化』はその記念号として刊行されます。せっかくの機会ですから、この場を借りて人文学というものの意義について話してみませんか、と長谷川先生をお誘いしました。というのは、授業やゼミで学生の皆さんと話してみると、「人文学がどんなものか、よく分からない」という声が非常に多いんですね。はっきりとしたイメージが湧きづらいらしい。そこで、人文学部生に向けて何かヒントになるようなものを提供できればと思います。

長谷川 そう、学生はもちろんですが、我々が学外の人たちと接触するときにも「人文学部って何ですか」という質問はかならず付いて回ってきます。だから、これは我々が常に考えてなきゃいけない問題ともいえます。

中村 本題に入る前に、前置きとして自己紹介のようなことをしゃべっておきますと、我々二人は人文学部に所属して、ともに文学の研究をしています。長谷川先生は英語の詩、ぼくは和歌を専門にしていますから、関心の持ちようは多少違いますが、大きくいえば詩の研究者であるという共通点があります。一方で、当たり前のことですが、二人のあいだには相違点もある。年齢も、これまでのキャリアも違いますし、何よりぼくが文学部の卒業生であるのに対して、長谷川先生は教養学部のご出身なんですね。教養学部というのは人文学部の別名といってもいいくらいよく似た性質の学部ですから、長谷川先生はやはり「人文学こそがホームだ」という意識をお持ちです。一方でぼくとしては、人文学部に勤めながら、じつは「人文学ってアウェイだなあ」という意識があります。そういう点でかなり対照的な二人でもありますから、いろいろな方向から人文学を考えるのに適しているのではないかと思うんです。

■人文学とは

中村 さて、まずは「人文学とは何か」という根本の問いですね。これは「人文学部」と言いかえても同じことだと思いますが。

長谷川 よく「人文学部って何をやってるのかよく分からない」と言われます。たとえば工学部とか、商学部、経済学部、薬学部、医学部なんかは職業と直結している。つまり、そこで最も典型的な学生は、法学部であれば法律に関係する仕事をするのだろうし、薬学部であれば薬剤師になるのだろう、と漠然とイメージできる。そんなふうに職業や将来像に直結していることが、他の学部の「分かりやすさ」につながっています。反対にいえば、人文学部の分かりづらさは職業に直結してないところに一つの原因があると思います。この点で人文学部に似ているのは理学部かもしれません。「理学」と言われても、「それは何ですか？」となりかねません。人文学部にいる学生たちはあまり理系の学問を意識したことがないでしょうから、人文学部だけが分かりにくいんだと思ってるかもしれませんが、別に人文学部だけが仲間外れではないということは覚えておいていいんじゃないかな。

世の中には、普通に通用してるのにあらためて考えてみると何だかよく分からないものが、意外にたくさんあります。政治みたいなものも、さも当然であるかのように存在しているけど、じゃあ政治とは何なのかと考えるはじめると、やっぱりよく分からない部分があります。人文学部の学生は、そういう点では有利なところがある。つまり「よく分からないもの」について意識すること、考えることができるんです、自分の所属している学部自体がそういう存在だったから。分かりづらいものについて、自覚的に考えることを促される環境にある。そのことを、できれば自分たちの長所だと受け止めてほしいですね。

中村 学生も、教員も「人文学部」について考えつづけることが大事なのだと思います。そして、それは人文学部の外だけではなくて、内に向かっても考えつづけないといけない。なぜなら人文学部最大の特徴は、さまざまな研究者が集まっているという点にあるからです。たとえば医学部なら、内科学、外科学、眼科学、産科学、麻酔学というふうに細分化されていても、それぞれの専門内容は非常に近い。ひっくり返せばすべて医学です。一方、人文学部は文学、歴史学、地理学、文化人類学、気候学……と、ありとあらゆる分野の研究者がいる。まるで大学全体を縮小コピーしたような学部です。

当然、隣にいる人は自分とまったく違った専門を勉強しています。教員ではありません。

学生だって哲学のゼミで『存在と時間』を読んでも人もいれば、海洋学のゼミで瀬戸内海の潮流を調べている人もいます。人文学部というのは内部がじつに多様で、常に「自分と違うもの」が抱えこまれています。だから、学部の外にいる人だけでなく、学部のなかにいる友達に向かって、「自分にとって人文学とはこんなものなんだ」という説明をしなくちゃいけない。これはもう学部の宿命みたいなものです。

ですが「自分にとって」という点を説明するだけでは不十分なんです。一人一人違ってはいるけれど、同時にみんな人文学を学んでいるのだから、共通する部分はかならずあるはずなんです。それを見つける努力もしなければならぬ。「自分だけの人文学」と「みんなの人文学」と、どちらが欠けても人文学部は成り立たない。

結論から言うと、人文学という学問があるわけではないと思うんです。いろんな学問が集まって、その全体をまとめるための名前として人文学がある。だから、個々の学問の内容も大事だけれど、多様な研究対象や手法、興味のあり方が、互いにどんなふうに結びつき、関係しあってゆくかが肝心なんです。他の分野とコミュニケーションをとることで、自分では思ってもみなかった「化学反応」が生まれる。それが人文学部の醍醐味です。

■人文学的な態度

長谷川 そうですね。それから中村先生が言うのとはまた別な特徴として、人文学的な態度、人文的な視点のようなものがあると思う。普通学問というのは何を対象とするかによって分類されるけれど、もし人文学全体に共通の枠組みがあるとしたら、それは対象ではなくて、対象をとらえるときの態度じゃないだろうか。

卑近な例を使えば、たとえば人文学部が一つのレストランだとする。それ相応のちゃんとしたお店なんだけれど、でもたぶん「うちは蕎麦しか出しません」とか「うちはステーキ専門店です」といった専門店ではなくて、美味しいものなら何でも出すというのが人文学部なんです。だから、「このレストランは何料理屋さんなのですか」という質問にはちょっとうまく答えられない。でも、ちゃんとしたレストランである以上、お店のポリシーはしっかりあるに決まっています。人文学というもののポリシー、あるいは明確な枠組みはある。しかし、それは一つの方法論ではまとめられない。「こういう研究のやり方をすれば人文学である」というかたちでは、人文学を定義できないと思います。

人文学は社会科学、自然科学と並ぶカテゴリーであるわけだけど、自然科学は研究手法として実験という明確な特徴を持っています。社会科学だとそれにあたるのは統計でしょう。しかし人文学は、方法論としてどういうものを持っているのか、ちょっと見えにくい。他方、研究対象で比較した場合、自然科学はやはりこの世界を自然物、つまり物として捉える。社会科学は人間と人間が作り出した社会との関係というところに焦点を当てて、この世界を考える。それでは人文学はどうかというと、この世界を自分が見たものとして捉えようとするんだね。そうすると明らかに同じものを見ている、自然科学、社会科学、人文学では見る態度、視点が違うことになるはずなんです。

たとえば、自然科学者が山を見るときには、「この山はどうやってできたのか」とか、「どんな生物が暮らしているのか」といった視点で対象を捉える。でも、人文学者が同じ山を見たら、これは一例ですが、「どうして人間は（あるいは自分は）この山を美しいと思うんだろう」とい

う態度になるんじゃないか。だから同じものを見ても、おのずと見方が違ってくる。ではその核にあるのは何かというと、やはり人間なんです。もちろん社会科学だって人間なしでは成立しないけれど、人文学の場合はそこで「隣の人と自分とは何かちょっと違う」という要素が入ってくる。同じ山を見ていても、人によって、または文化によって見方が違う、という発想ですね。自然科学では山の見方が違うなんてことはあり得なくて、富士山はいつでも3,776メートルだということになる。でも我々人文学の世界では、ある人は富士山に崇高さを感じるのに、ある人は月並みな凡庸さを感じる、ということが問題になってくる。

だから、人文学が多様であるというのは無論そのとおりなんだけれども、その多様なものを統一している原理があって、それは「人間中心の視点」。さらに言えば「自分というものを中心とした視点」ということになると思います。いい意味でも、悪い意味でもね。

中村 よく「人文学は人間に関わる学問である」という、雑然とした説明をされることがあるのですが、あれはかならずしも正しくないですね。たとえば自然科学の一分野である医学や薬学も人間を対象としている。心理学や社会学は社会科学に含まれるのですが、やはり対象となるのは人間です。それではどこに違いがあるかということ、やはり人間というもののとらえ方なんですね。医学や薬学が人間を考える場合、「一般的に人間は」という視点から病気の治療法や薬効を検討する。特定の個人にしか効かないワクチンなんか開発しても意味がないわけです。心理学や社会学だって「人間というのは一般的にこのような条件下ではこのように行動する」というのを研究するものであって、だれか一人に的を絞ったりはしない。人間をかたまりとして捉え、全体的な傾向を考えようとするのが自然科学、社会科学の特徴です。

人文学も人間全体に対する興味がないわけではないんですが、出発点としては「人間は一人一人違ったところがある。だから、まずは個々の人間を考えてみよう」という態度なんです。文学研究だって、ある一つの作品、漱石なら漱石、『虞美人草』なら『虞美人草』に焦点をあてて、その作品の特徴、個性について論じるのが基本です。漠然と文学全体、あるいは小説全体、漱石作品全体を考えるという研究は、たいてい失敗する。おそらく人間についても同じことが言えます。のっけから人間全体を問題にするというのは、人文学の態度ではありません。一人一人が持っている特徴、個性をていねいに観察し、考えをめぐらして、あれこれ分析や検討を加えたうえで、最後の最後に人類の普遍性といった問題にたどりつく。それが人文学の態度だと思うのです。

ですから、人文学は基本的な姿勢として一人一人の人間を尊重します。人間がそれぞれ異なった個性を持っているという事実に敬意を抱くことが、人文学の出発点です。ぼくはこうした学問が、我々の社会にとって無意味だとは決して思えないのです。むしろ人間社会のもっとも重要な部分を下支えする教養だとさえ言えるのではないのでしょうか。確かに人文学部は職業訓練の場ではない。けれども、医学部が医者になるための学部だというのなら、人文学部は人間になるための学部だということもできます。人間になるということは、個々の人間が持っている価値や尊厳を知ることです。

たしかに人文学はとりとめがなく、あいまいな面もあります。ですが、やはり中心には、「人間が世界とどう関わっていくか」という問題意識がある。もちろん人間といっても、一般論としての人間ではない。ほかのだれでもないこの私が、あるいは私の隣にいるあなたが、世界をどんなふうに捉え、どんなふうに関わってゆこうとしているか。そうした興味こそが、人文学の根幹にある態度だと思います。

■文化と人間

長谷川 自然科学が扱う「人」というのは、動物としての人間ですね。でも人文学が扱う「人」は、文化を持った「人」なんです。今、人文学部というのは人間になるための学部だと言われたけれど、それはつまり文化を持った人になる、あるいは文化を理解する人になるということです。

なぜそう言えるのか、このことを考えようとする、人文学の起源にまで遡ることになります。人文学の起源というのは西洋です。日本には近代になってから輸入されたものだから、どんなに遡っても200年くらいの伝統しかない。人文学の歴史を考えようとする、どうしても西洋、特にルネッサンスが重要になってきます。

人文学は英語でscience of humanitiesまたはhumanitiesと言うのですが、もう一つliberal artsという別名もあります。直訳すると「リベラル(自由)な人が学ぶべきもの」。話は古代ローマにまで遡りますが、「自由な人」というのはローマの平民のことで、言いかえると貴族でも奴隷でもない一般市民を指します。つまり、市民が当然知っておくべきことを学ぶのが人文学です。それでliberal artsは「教養」とも訳されるわけです。

ですから、根本には「市民とは文化を理解し、受け入れ、尊重することのできる人間である」という考え方がある。さらには文化を受け入れるだけでなく、維持して次世代に伝え、あるいは新しく生みだすのも市民の役割だという考え方がある。それを学部の目的にしたのが、人文学部なんですね。

「一般市民」という視点は人文学を考えるうえですごく大事です。先ほど中村先生は「学問」という言葉を使ったけれども、これは少し誤解を招く可能性もあると思うんです。今の社会のなかでは、学問という言葉はあまりに大学、研究者に特化した言葉になってしまって、「学問なら普通の市民はやらなくてもいいか」ということになりかねない。でも本来人文学というのはそうではありません。普通の市民が学び、身に付けるべき文化が人文学なんです。そういう意味では人文学部ではなくて、「文化学部」という名前だったら、学部の目的や意図がよりよく伝わったかもしれません。英語で人文学をscience of culture(文化の科学)と言ったりもするんですが——元々はドイツ語からの翻訳です——、それは人文学における人間の本質を「文化を持った動物」ととらえるところから生まれた言い方なんだと思います。

繰り返しになりますが、西洋の人文学は「人間というのは文化を理解し、維持し、育成する存在である」という発想に立っている。だからそれを専門とする研究者がいるというのは、本当をいうとちょっと変なことなんだよね。人間だれしもがするはずのことなんだから。たとえば文学なんてものは誰だって読むわけでしょう。ぼくは文学研究をしている人間だけでも、ぼくより多くの小説を読める主婦やサラリーマンもたくさんいるんじゃないかと思う。逆に言うと、日々小説を読んで、詩を読んで、それを職業としているってかなり奇妙なことなんです。若いころから自分の職業を不思議な仕事だなあと感じていましたが、ずっと研究をしてきて、今は逆に「現代の専門家というのはすべてそういうものだ」と考えるようになってきました。

つまり人文学が生まれたルネッサンスのころの西洋社会というのは、専門家なんてものはいないわけです。普通の人が文学を楽しみ、哲学の議論もし、科学的な知識も身につけていた。それが一分野ずつ独立して、専門家(テクノクラート)の管理に委ねられ、容易に一般市民が手出しできなくなってゆくのは、近代以降のことなんですね。現代の学問というのはこうした専門家の系譜から生まれてきたものですが、一方で人文学の場合はルネッサンスのころの伝統も残

している。

ぼくらは文学研究を専門にしているから、詩なり小説なりに対する付き合い方が、ほんの少しばかり普通の文学愛好者とは違うわけです。しかし、だからといって普通の人たちが「じゃあ文学を読んで楽しむことは、専門家にお任せしておきます」というのでは困る。普通の人も文学を読むべきだし、それは市民としての大切な「役目」です。人文学を学ぶというのは、その「役目」を特別に意識できるようになる、その専門家になるということなんじゃないでしょうか。

文化を大事にしたり、育んだりすることは、すべての人がすべきだし、したほうがいいんだけど、人文学部生は特に意識して文化を守るという態度を身につけてほしい。それは社会の成熟や個人の幸福とも大きく関わってくる重要な使命だと思う。充実した文化というのは、やはり個人の幸せと関係しているはずですから。

■「専門家」と市民

中村 「専門家」をどうとらえるかというのは、人文学を考える上でとても重要な問題ですね。専門家（もしくは学者）には二つの型があって、一つ目は「その分野のことだけをずっと研究していて、ほかの分野をのぞいたことは一度もない」というタイプ。こういう人にとっては、たとえば『万葉集』なら『万葉集』を研究するのがどうしてそれほど重要なのか、という問いは存在しません。他のものを見たことがないわけですから、『ルバイヤート』でも、『荒野』でもなくて、あえて『万葉集』を選んだ理由をわざわざ説明する必要はないのです。ある意味ではもっとも幸福な研究者であって、自分の研究対象に万全の自信を持っていられる。

ところが、二つ目の型として「さまざまな分野を幅広く取りあげて研究している」という専門家もいます。こういう人は、どうして今、自分が『源氏物語』について研究しなくてはならないか、それが他の作品に比べてなぜ大事なのかを、まず自分に対して説明しなくてはいけない。そこが不確かだと、研究に本腰が入らなくなってしまう。

第一の型の専門家と第二の型の専門家では、研究に取り組む心構えがだいぶ違う。違うだけではなくて、先ほどの話に関連していうと、第二の型のほうがおそらく普通の文学愛好者に近い判断ができると思うんです。つまり、『高慢と偏見』でもなく、『パルムの僧院』でもなく、あえて『源氏物語』を選んだという背景には、「他に比べてこれがいいんだ」という自分の判断と、「でもひょっとすると、もっといい作品が世の中に隠れていて、自分はそれに気づいていないのかもしれない」という一抹の不安が、ない交ぜになって存在している。

ぼくには、それが社会と文学の関係をそっくりなぞっているように思えるんです。つまり世の中には「文学っていいものだ、大切なものだ」という考え方もある一方で、「別にこんなもの役に立たないじゃないか」と思っている人もいます。どちらも間違っているわけではなくて、文学にはたしかにそうした両面があるし、それを意識するからバランスが取れる。普通の文学愛好者というのは、いつもそうした複合的な視点で文学をとらえていると思うんですね。ところが第一の型の専門家には「別にこんなもの……」という態度が決定的に欠けている。不安がなく、自信だけなんです。その点で一般の文学好きからはかけ離れている。

人文学の専門家は第二の型でなくてはいけません。研究対象を「いいな、すばらしいな」と感じながら、他方では「でも、さらにいいものがあるかもしれない」と思える専門家でありたい。そこから対象を複合的に見る態度が生まれてきます。自分の思いこみだけでとらえるのではな

く、多方面からいろんな価値観によって眺める姿勢が身につく。

ですから、人文学というのは「市民のたしなみ」なんです。人文学、あるいは文学は決して世捨て人のたしなみではない。市民というのは、当たり前の人間として社会のなかで暮らし、隣のひととある程度つき合いながら、自分の属する共同体を少しでも良くしてゆこうとはたらく人のことです。そういう人に必要なのは、第一に自立した人間としての意志であり、第二に因襲や偏見にとらわれない自由なものの方であり、第三に他者に対する理解、共感であり、第四に他者との違いを対話によって乗り越えてゆこうとする能力です。先ほどの「いいな、すばらしいな」というのは第一と第二の、「別にこんなもの……」というのは第三と第四の条件を育ててゆくための基盤なんですね。だからこそ人文学者は「脇目もふらずこの道一筋」の専門家であってはいけません。

長谷川 そうだね。ぼく自身も人文学科の卒業生なんですけど、やはり3年生のときに卒論をどうしようかずっと悩みました。マックス・ウェーバーにするか、日本文学にするか、西洋古典学でラテン語の詩について書くか、それともイギリス文学にするか、あるいは西洋音楽史にするか、候補が五つあったから。まさに中村先生の言った第二のタイプだったわけです。本当にどれもいいなと思って、そのときはイギリス文学を選んだんですが、じつはいまだに「君はイギリス文学の専門家なのか」と言われると「ちょっと違うかもしれない」という気がしています。

そのあと進んだ大学院でも、ぼくは当然ながらイギリスの詩について勉強してんですが、隣の研究室では言語哲学、二つ隣ではドイツ文学のロマン派の話をしているといった環境だったので、いろんな授業に出てみました。結局、博士論文もイギリスの詩とフランス哲学と西洋美術史が合体したような研究になりました。

もちろんぼくのいた大学院にも、その下の大学にも、文学部というものはあって、その人たちとも交流しましたが、彼らは本当に研究者としての構えが違うんですね。それをひと言でいうと、文学部の人はやはり中村先生が言った第一の型なんです。反対に人文学の側は、ぼくも含め第二の型なんです。やはり人文学の場合は、一人の人間のなかに「専門家としての長谷川」と、常に当たり前のことだけでも「普通の文学愛好者としての長谷川」が同居してるんです。これは「研究者としての自分」と「市民としての自分」というふうに言いかえてもいい。

一つ具体的な例を挙げると、以前、ある政治的な問題が起きたときに、同僚から「研究者としてのメッセージを出すから、それに名前を連ねてほしい」という依頼があったんです。そのとき、ぼくはすごく不思議に感じました。というのは、ぼくはすでに無名の一市民として同じメッセージに参加していて、寄付もしていました。もちろん同僚の人はまったく善意から呼びかけを行っているんだけど、どうも「自分たちは普通の市民とは違う責任を負っていて、研究者として発言しなければならない」と考えて行動しているらしい。別にそれで同僚と対立したというわけではないんですが、ぼくとしてはかなり強烈な違和感を味わいました。

そういうふうに、大学にいる研究者というのはどこか普通の人とは違うという感覚があったりします。どうしても大学人と一般市民を区別して考えがちなんだけど、たぶん人文学部はその垣根が他の学部より低いのではないかと思います。というのは、学部自体が「よき市民としてのたしなみ」ということを意識しているから。だから人文学の専門家は、何よりもまずよき市民であるはずなんだよね。大学人、研究者である以前に。

中村 よき市民としての研究者という点に関連して言っておきますと、長谷川先生も言われたように、人文学の起源はルネッサンスに遡ります。このとき『聖書』の研究も行われるようになる

のですが、それは聖職者たちの作った伝統的な注釈に従って読むのではなく、直接本文にあたって解釈を考えるというやり方でした。ルネッサンスの人文主義者は『聖書』専門の「研究者」ではなかったから、それまでの研究の積みかさねを無視して、こういう読み方ができたのだと思います。言ってみれば、ルネッサンスの人文学というのは、一人の市民として本を読むというところから始まったようなものです。

似たようなことは日本でもあって、江戸時代なかごろに伊藤仁斎という儒者がいます。彼は『論語』を読む際に、当時ほとんどの学者が重視していた朱熹の注釈に頼らず、本文を自分の目で読み、解釈するんですね。やはり仁斎には「研究者」として以前に、一市民として『論語』を読むんだという意識があったのだと思います。

もちろん本を読むためにはある程度専門的な訓練が必要なのですが、「専門家としての常識」に縛られすぎてもよくない。まして専門の研究者による積みかさねを金科玉条のようにして墨守しはじめたらおしまいです。一つの本を専門家として読み、同時に普通の市民としても読む。そういう複眼的な読書ができないと、書物の持つ真の価値を理解することはできません。「研究者である以前によき市民である」という人文学の態度は、研究の上でも大変重要なことだと思います。

■普遍性と論理性

中村 さらにいうと、本に書かれた内容を解釈することも含めて、人文学の場合「対象を理解する」という行為がとても大きな意味を持っています。ぼくはその背景に「人間には普遍性が存在する」という考え方があると思うのですが、最近、普遍性というのは学問的な話題として取りあげられづらい傾向がありますよね。長谷川先生はどう思われますか。

長谷川 たとえば動物としてのヒトには普遍性があるわけでしょう。みんな心臓が止まると死ぬとかね。だから人間には誰にでも共通する部分というのがあるんです。もちろんそれぞれが個人としての自覚や意識に従って行動するときには、てんでに勝手なことをして、共通点なんかないようにも見える。しかし、人間は勝手に行動しているようでいて、好みと価値観があり、さらにそれは文化や歴史によって集団的にある程度傾向づけられてもいます。つまり、人間というのは各自意志を持っていて、本来なら互いに孤立してもおかしくない動物なんですが、実際には共同体を作って生活している。その不思議さ、驚きを知ることが、じつは人文学部というものの目的の一つなんです。

ぼくらはソクラテスなり、プラトンなりの言ったことが理解できます。しかし、それはよく考えてみると、異常な出来事なんですね。彼らが生きていたのは2600年前ですから、言語も違うし、文化も違うし、社会も違う。それなのに、会ったことも見たこともないソクラテスの生き方に現代のぼくらは感動できる。そうになると、やはり人間としての普遍的な共通性というものを、認めるしかなくなるわけです。明らかに異質な相手なんだけれども、共感できる、理解できるという経験を日々積みかさねていく。その結果、個性と普遍性是对立するものでは全然ないということを体感するようになります。

ぼくは正直に言えばプラトンは嫌いですが、たとえ大嫌いでも、相手がまともな哲学者であるかぎり、言っていることは理解できます。理解した上でおかしいと思ったり、ちょっと受けつけられないと感じたりする。理解できるかできないかというのは、本当に大きな違いです。嫌

いなものが理解できるというのは、やはり驚くべきことだし、人間の素晴らしい能力です。好きなものが理解できるのは当然として、訓練さえすれば、嫌いなものも嫌いなまま理解はできる。それは人間の持つ普遍性が根底にあるからだと思います。

そして、これは成熟した市民社会を作っていく上で、とても重要な要素でもある。つまり、考え方や価値観は対立していても互いに理解することが可能なんです。人間というのはたとえ言葉が通じなくても、あるいは文化が違っていても、ぱっと見て今、困っているのか、満足しているのかぐらいのことは、たちどころに理解できます。もちろん、きちんと訓練すればもっと多くのことが分かる。そして、理解できる限りにおいては、やはり人間は普遍的な存在なんだという気がしますね。

中村 人間が持っている普遍性のかなり大きな要素として、論理性、合理性というものがあるのではないのでしょうか。筋道を立て、矛盾のないように順を追って因果関係の一つずつはつきりさせながら説明してゆけば、たいていのことは分かってもらえる。また、そのように説明してあるものは、こちらでも理解できる。もちろん「分かる」の度合いにもよりけりで、隠された意図とか、遠回しな誘導、背景になっている文脈なんかはやはりそう簡単に把握できない。でも、表現された内容なら、それが論理的であるかぎりだれでも理解できます。つまり、分かりあうことの基礎条件として、論理性というものを挙げられるのではないのでしょうか。人間にとって論理性が普遍でないのなら、ぼくたちが互いに理解しあうことは不可能なはずです。

先ほど人文学の特徴の一つとして、人間の相互理解を目指すということを言いましたが、相互理解には論理が欠かせません。だから、論理的に説明し、論理的に読みとるというのは、人文学にとって必須の技能であるし、技能という以上に基本的な姿勢、態度でもあるんです。ぼくらはそのために努力しなくちゃいけない。「一々説明するのはめんどうだから、こころあたりは適当でいいだろう」とか、「何がどうなってるのかよく分からないけど、まあ相手のほうで汲みとってくれるだろう」とか、「言ってることがちっとも理解できないけれど、多分それは自分の頭が悪いせいだろう。あきらめた」なんていうのは、人文学の態度ではありません。

人間の持っている論理性を信頼すること。それが人文学の基礎だと思います。もちろんどんな分野でも論理性は大事なんですが、人文学はまずそれを揺るぎない存在として信じるところから始めないといけない。理解しあうことが最終目的なのですから。人間はどうやったところで、一定の論理性を持たないものは理解できないんです。

■個性と他者

長谷川 論理性に関連してちょっと補足しておくとな、人文学に芸術や文学が含まれているせいなんだろうと思いますが、人文学というのはいわゆる科学的なものとは対極的な価値観で動いている学問ではないか、という誤解が世の中にはびこっています。でも、それは全然違う。

英語で理性をあらわす言葉に *reason* というのがあるんですが、語源的には *ratio* (比率) と同じだと言われています。つまり、理性もしくは論理性の根元にあるのは比べる、比較するという発想です。たとえば自然科学における観察という方法も、じつは一種の比較です。朝顔なら朝顔が、昨日と比べてどれぐらい成長したのかを観察しているのだから。つまり、人間の理性のもっとも原初的な働きとして、おそらく比較があるのではないのでしょうか。

そうすると、個性という問題とも関わりが生じてきます。基本的にぼくらは自分と隣の人を

比べることによって、様々なことを学んでいくはずです。ですから、理性の働かせ方というのは、最初の段階ではどうしても「自己中心的」になります。人間は自分の視点でしかものが見られないのだから、人文学はそれを絶対的な前提として進んでいくしかない。当然、自分の目から見ると、隣の人はまったく違った存在に映る。好みも、考えも、やっていることも全部違うわけです。が、その違いのなかから我々は学ぶんです。

そして、他者は自分の外部にいただけではありません。人間は自分の内部にも他者を抱えています。たとえば先ほど言ったように、卒論を書くために専門を決めようとしたとき、ぼくにはいくつかの可能性があった。結局はその中の一つを選んだわけですが、自分のなかにはいろいろな自分がいるし、いろいろな自分になれる「種」を秘めているんです。もちろん人生は一度しかないから、すべての可能性を実現することはできないけれど、先ほど言ったように、ぼくは自分の内に研究者としての自分も、市民としての自分もいると感じているし、さらにもっと多様な自分がいるとも思っています。ときには自分のなかに、自分ではないものが隠れていたりする。そうした「自分」の多様性、可能性みたいなものを比較することによって、我々は学ぶことができるんです。

ただ、いずれにしろ違いは見ているだけでは気づけない。なぜなら人間は言葉にしない限り、はっきりとものを見られないから。目に入っているのに、見えてはいないということがよくあるでしょう。探し物がたとえ目の前にあったとしても、見えていることが意識できないせいで見つからないことがよくある。見つけるということは、見ているものが意識化されるということです。そして見つかった瞬間、ぼくらは「ここにあった」という言葉を発して、言語化を行うことで視界がより一層開けるという仕組みを持っています。

だから、学生たちには、まず人文学部の持つ多様性に触れてほしい。自分と比べながら、違いを実感してほしい。それは勝ち負けを比べるのではなくて、「他の人は一体どんな面白いことをやっているんだろう」「あの先生はどんな楽しい研究をしているんだろう」という興味を持って、積極的に知ろうとしてほしい。人文学部というのは、そうした「異質なもの」に簡単に触れられる環境なのだから。

さらには、外側にある異質さに触れていくなかで、やはり自分のなかの「異質なもの」にも気がついてほしい。今の時代は、何でも一色に塗り込めることを社会から強要されている感じがします。それは個人の内面についても例外ではなくて、たとえば最近だと「東京オリンピックに反対なら、メダリストを讃えるのは矛盾している」というような意見がありました。だけど人間の内面というのは矛盾してるのが普通なんです。だからその多義性、多様性に耐えられるあり方を、学生たちには身につけてほしい。

それから、学生たちの多くは専門の研究者になるわけではないけれど、「専門的なものの見方も理解できなくはない」という社会人になってほしい。自分が専門家になる必要はないにしろ、専門家はどうかちょっと違った立場でもものを見ているらしいということぐらいは、やはり市民のたしなみとして知っておかねばならないと思います。またそのほうが社会はより豊かで、成熟したものになるはずです。

こう考えてみると、人文学部というのは結構使い道がある場所だと思いますね。

中村 たしかにおっしゃるとおりで、まともな社会を作ろうとすれば人文学というのは絶対に必要なものなんです。「人文学部は必要ない」という意見が出てくるのは、社会がまともであろうとする努力を放棄したからではないか、あるいは一人一人の人間が市民としての責任を放棄し

たからではないか、とさえ思ったりします。

人文学部というのは、人間が成長するのに適した環境なんです。成長というのは、人間がもとから持っているものを拡大することではない。もとから持っている自分に新しい自分が付けくわわって、「自分のなかの他者」が次々に増えてゆくからこそ成長といえるのであって、もともとの自分が大きくなるだけなら、それは自己肥大に過ぎない。「自分のなかの他者」を増やしてゆく最もよい手段は、「自分の外側にいる他者」と触れあい、自分との違いを比較しながら、彼らの異質さを受けいれていくことです。人文学部の持つ豊かな「異質さ」は、かならず成長の手助けとなるはずです。

だから学生のみなさんには、せっかく人文学部に來たのだから、できれば成長ということ意識してほしいですね。「自分のなかに今までなかった要素を付けくわえて卒業するんだ」ということを、頭の片隅でいつも考えていてほしい。

それから、もうひとつリクエストすると、知的な体力を身につけてほしい。次々と出会う「異質さ」を理解し、また自分の「異質さ」も積極的に表現してもらいたいと思います。人文学部は、長谷川先生が言われていたように、おいしいものなら何でも出すレストランなんです。和洋中、いろんな料理が絶え間なく運ばれてくるのですが、ときどき「もうお腹いっぱい食べられない」という人がいる。理解するのがしんどくなって、途中であきらめてしまうんですね。だから学生のみなさんは、うんとお腹を減らして人文学部に來てほしい。

長谷川 うん、そう(笑)。

中村 おいしいものがせっかくいろいろあるのに、すぐ満腹になってしまっってはもったいない。「テーブルの上に出てきたものは何でもかんでも勉強してしまおう。隙あらば厨房に忍びこんでつまみ食いしよう」というくらいの意気込みで、どこまでも食らいついてほしい。人文学部に必要なのは、知的な空腹感です。

(2021年8月20日対談)